

坂田寺第3次の調査

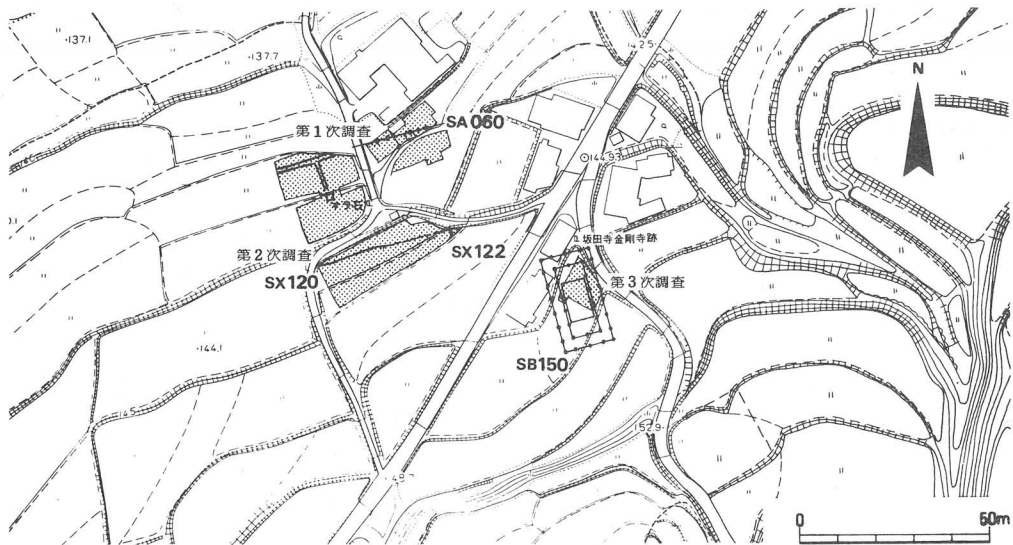
(昭和55年4月)

この調査は、明日香村営上水道加圧ポンプ場の建設に伴う事前調査として実施したものである。調査は当初約20㎡を対象としたが、重要な遺構の検出に伴い再三にわたって発掘区を拡張して、最終的には約100㎡について調査を行った。調査の結果、須弥壇を伴う基壇建物の一部を検出し、この地域が坂田寺伽藍の中枢部分にあたることが判明した。なお、これに対する村当局の迅速な措置により、ポンプ場の建設位置は変更されることになった。

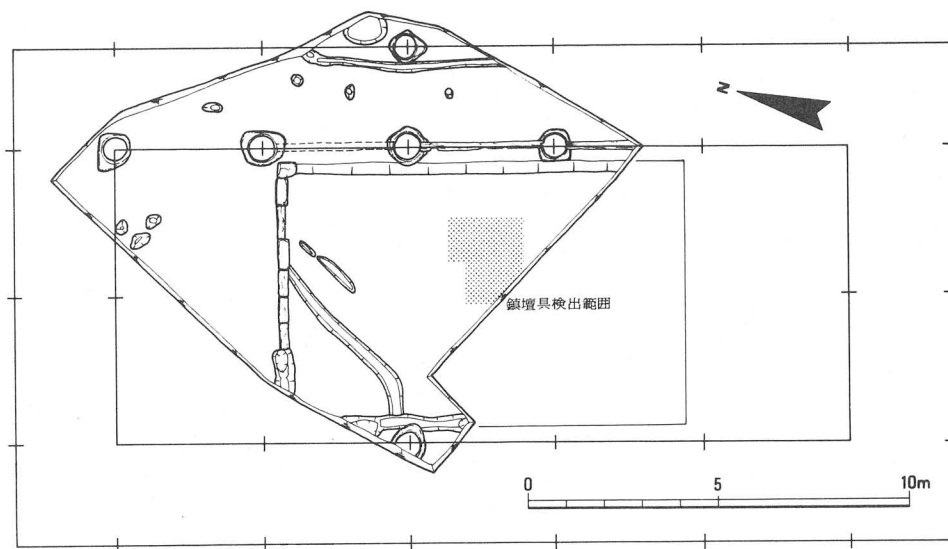
調査地は『坂田金剛寺址』の石碑に南接する水田で、古宮（フルミヤ）の小字名を有する。地形は南東から北西に下るかなり急勾配の傾斜地である。

遺構は現水田面から0.9～1.2mの深さで検出した。遺構面に至る層序は、上から、床土、粗砂と粘土の互層による厚さ50cm前後の堆積層、20～30cmの厚さの粘質砂質土層と続く。この下には厚さ10cm前後の焼土層があり、遺構面直上に堆積している。焼土には漆膜片、白土、炭化材片、土器が含まれていた。

SB 150の遺構 SB 150 は主軸方向が東で北にはほぼ15度偏する南北棟で、



調査地位置図 (1 : 2000)



遺構配置図 (1 : 200)

桁行 5 間，梁行 2 間の身舎の四面に廂が付く基壇建物であると考えられる。この調査では東入側柱 3 間分と東側柱礎石，西入側柱礎石各 1 を検出した。基壇端は調査区の外に想定される。柱間寸法は身舎が 3.86 m (13 尺) 等間，廂の出が 2.68 m (9 尺) である。従って建物としては桁行総長 24.7 m (83 尺)，梁行総長 13.1 m (44 尺) の規模に復原できる。礎石は花崗岩を加工したもので，いずれも円形柱座を造り出している。柱座径は入側柱礎石で 66～71 cm，側柱礎石で 58 cm である。

身舎の中央 3 間分は柱筋より内方に 30～40 cm 寄せて，周囲の基壇面より約 20 cm 高い平面長方形の壇状につくられている。これは仏像や厨子などを置く須弥壇と考えられる。壇の北側縁は凝灰岩の切石により仕切られ，西側縁には切石の抜取痕跡が確認された。一方，東側縁には壇化粧の痕跡がなく，約 45 度の勾配をもつ傾斜面をなしており，それに接する 3 間の柱間には復原方約 13 cm の断面をもつ角材が置かれていた。この角材は壁受の横木と考えられ，この 3 間は壁面であったと想定される。従ってこの部分が須弥壇の背面にあたり，建物は西方を正面とするものであったことがしられる。基壇および須弥壇上面は粘質土で堅く固められており，直上には倒壊した壁の白土や銅釘なども焼土に混って堆積している。このことから基壇面は本来舗装のない土間床であったと思わ

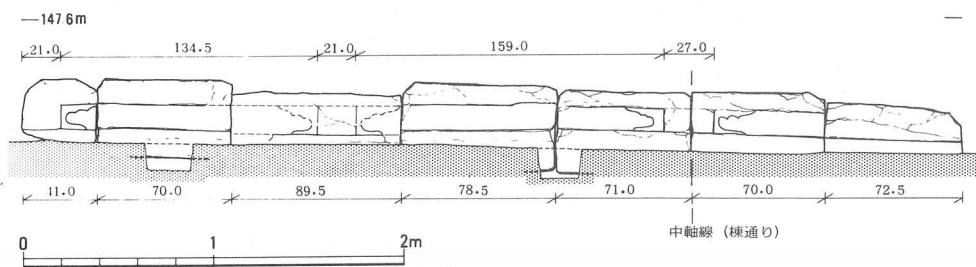
れる。なお、基壇面は西方（正面側）がわずかに低い傾斜面につくられている。

凝灰岩切石は須弥壇の北側縁に7石遺存していた。東端の隅石は51.0×41.0 cmの平面矩形を呈し、他の6石のうち4石は長さ70.0～72.5 cmで、残りの2石は89.5 cm、78.5 cmと不揃いであるが、東から5石目と6石目の境は建物のほぼ棟通り（南北中軸線上）にあることから、両端に隅石を置き、間に8石の切石を配していたと想定される。これらの切石は表面を加工して地覆、羽目、束、葛を削り出しており、さらに束の両側には花頭曲線の格狭間を浮彫りにしている。束の幅は東隅が21.0 cm、北側縁中央が27.0 cm、両方の中間が21.0 cmであり、羽目1区の長さは東から134.5 cm、159.0 cmである。東から2番目の束と中央の束との心々距離はほぼ180 cm（6尺）、また隅石の羽目から中央の束心までは329 cm（11尺）であることから、中央2区を6尺、両端の2区を5尺で割り付け、さらに中央の束幅を9寸、両側4カ所の束を各7寸幅に設定したものと考えられる。

基壇および須弥壇の築成工程を明らかにするために一部断面調査を行った。地山面（細砂層）は基壇の東部分では須弥壇の位置に比べて廂部分が深く、地山面上には約70 cmの厚さに人頭大の石塊や瓦片を含む土層が不整合の状態で見積している。この堆積土面を切って須弥壇範囲に、深さ約40 cmの掘込み地業を



SB 150（南から）



須弥壇縁石立面図（1：40）

行った後、据付け穴を掘り、礎石を据えている。その後、基壇面全面にわたって厚さ10 cm前後の黄褐色粘質土を敷きつめる。後述するように、須弥壇鎮壇具はこの工程に併行して埋納されている。その後、須弥壇を厚さ5 cm前後の版築層を4～5層重ねて築成する。なお、掘込み地業土や版築土中には礫や瓦が若干混在していた。須弥壇背面は基壇築成層を削って斜面につくり、他の三面は据え形をやや深めに掘り込んで凝灰岩切石を据え付けている。以上のように基壇築成に際しては、この部分に限ってみれば礎石据え付け以前の基礎地業が行われていないようである。しかし、須弥壇北側部分の断面調査では、須弥壇下に連続する厚さ5～10 cmの土層が基壇面下約1 mにおよぶ範囲に整合状態で堆積しており、東側とは異なった状況を呈しているが、今回の調査では全体の様子を十分解明するに至らなかった。

鎮壇具 調査の最終段階に至り、須弥壇の鎮壇具を探查すべく発掘区を設けた。その結果、須弥壇のほぼ中央の、約1.3 m東（背面）寄りの位置に径約80 cmの範囲にわたって10種40点におよぶ埋納品を検出した。これらの埋納品は厳密には中軸線から20 cm程右寄り（南寄り）に分布しており、最奥部に鏡を背面を上にして置き、その周囲に金箔、水晶玉、琥珀玉、銅銭、刀子、金銅製挟子を配する。鏡から正面寄り約40 cmには灰釉小型双耳瓶があり、また鏡の直下には瑠璃玉2個が置かれていた。銅銭には重なった状態のもの（2カ所—10点と9点）と1枚ずつのもの（9点）とがあり、そのうちの1点は他の埋納品から離れて、鏡から南西方1.5 mの位置に検出した。また絹布片を2カ所で確認した。これらは先述のように、須弥壇築成直前の、基壇全面を覆う粘質土を敷きつめる工程に伴って安置されており、須弥壇上面から18～26 cmの深さに集中

している。以上のように、埋納に伴う掘形は認められなかったものの、位置および埋納の状況からみて、この一群の埋納品は須弥壇の築成にかかわる鎮壇具であると考えられる。なお、須弥壇北東隅においても1m四方の範囲を掘り下げて鎮壇具の有無を調査したが、1点の埋納品も存在していないことが判明した。

出土遺物 SB 150 の須弥壇下から出土した鎮壇

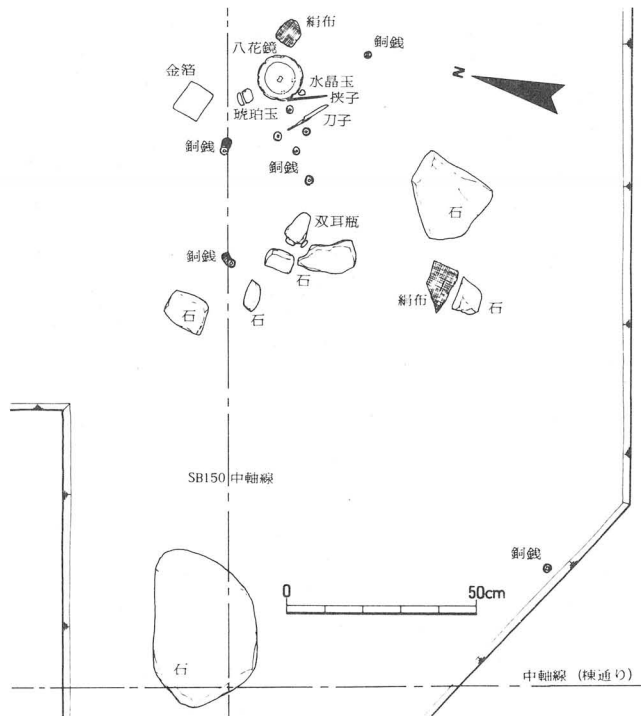
具には瑞雲双鸞八花鏡1面、心葉形水晶玉1点、琥珀大玉2点、瑠璃玉2点、金箔1点、金銅製挾子1点、鉄製刀子1点、銅銭28点、灰釉小型双耳瓶1点のほか、絹布の断片がある。

瑞雲双鸞八花鏡(11)は青銅製の唐式鏡である。鏡背の文様は界圏で内区と外区を分け、内区には円鈕を挟んで鳳凰が相對し、上に瑞雲を、下に蔓草の上で実をくわえる鳥をあしらう。外区には各弧ごとに飛雲と草花を交互に配する。鏡面はわずかに反りをもつ。文様は不鮮明で線が太く鈍い。表面径11.4cm、背面径11.0cm、縁厚0.45cm、界圏径7.4cm、重量155gである。

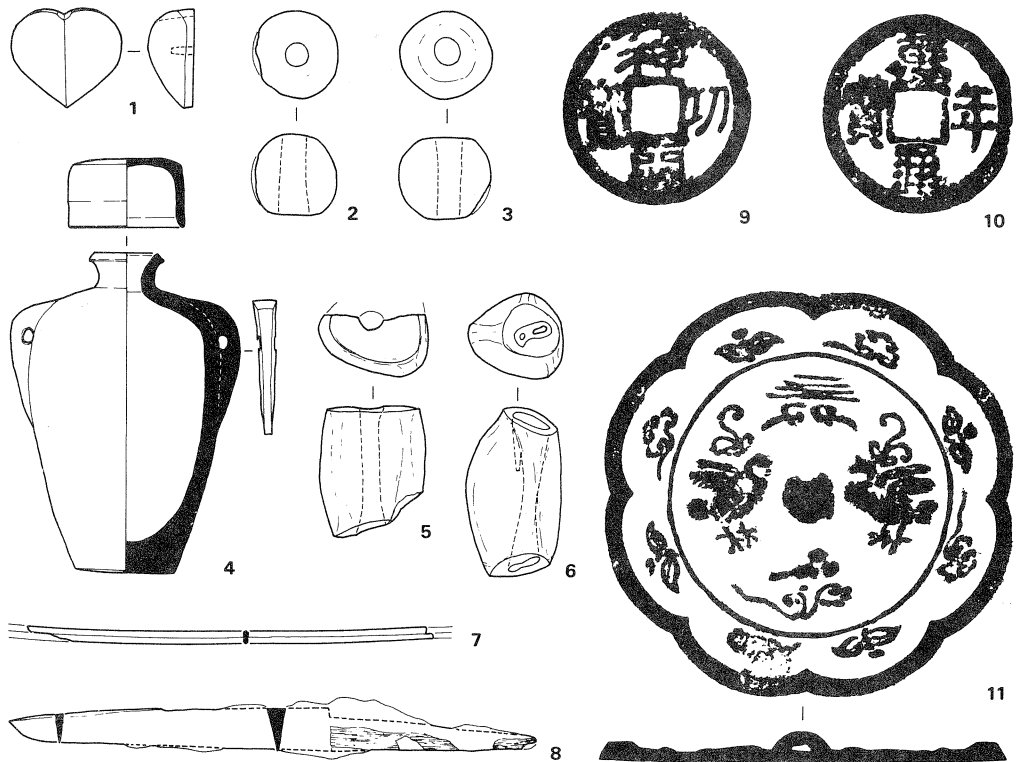
心葉形水晶玉(1)はハート形の平面をもつもので、長さ1.3cm、厚さ0.6cmである。表面は平滑な曲面を呈し中央に鋭い稜をもつが、裏面は平坦面で中央に深さ3mmの貫通しない小孔があく。周縁は垂直面をなす。

琥珀大玉(5・6)は長さ4.5cmと3.4cmの2点がある。4は埋納以前に縦に半割している。断面は不整形円形を呈し、中軸に貫通孔があく。

瑠璃玉(2・3)は径・厚さとも1.1～1.2cmの丸玉で、上下両端をやや平



鎮壇具出土状態実測図(1:20)



鎮壇具実測図（1～3，9，10は1：1，他は1：2）

坦面につくる。中軸に径3mmの貫通孔があく。現状では白濁しており、表面の風化、剝落が進行している。

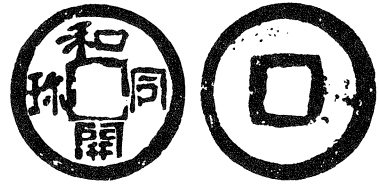
金箔は約7×9cmの長方形のごく薄いものである。鎮壇具のなかでは最も北よりの位置に置かれていた。

金銅製挾子（7）は両端を折損した残欠であり、表面には鍍金がわずかに残る。現存長10.8cm，直径1.7mmある。

鉄製刀子（8）は平造りの刀身をもち、茎部に把の木質が残るが、刃部にはない。全長14.0cm，最大幅1.1cm，刃部長8.5cmある。

銅銭（9・10）は28点を数える。和同開珎（2点），萬年通寶（3点），神功開寶（11点）の3種があり，銹化や銹着のため銭文の不明なものが12点ある。先述のように2カ所では積み重ねた状態で埋納されており，そのうちの一群は萬年通寶3点，神功開寶7点計10点からなる。他の一群は9点が重なるものの，銹着しているために和同開珎2点を確認されたにとどまる。

灰釉小型双耳瓶（4）は肩部に1対の把手がつく小型の製品で、被せ蓋を伴う。瓶の肩部以上および蓋の上面には濃緑色の釉がかかる。瓶の器高8.4 cm，口径1.6 cm，胴径5.0 cm，底径2.6 cm，蓋は器高1.8 cm，口径3.0 cmある。



和同開珎銀錢（1：1）

絹布は築成土中に圧着した状態で検出した。腐蝕が著しく，2カ所で存在を確認したにとどまる。そのうちの1点は15×10 cm以上の広さをもつ平織りであることがわかるが，本来の形状等は不明である。絹布は腐蝕しやすい物だけに，鎮壇具の1つとして埋納されたものであるのかどうかについては出土状態のみでは決めがたい。

基壇および須弥壇上面の焼土層から銅釘，土師器，漆膜片，和同開珎銀錢が出土し，焼土面上の堆積層から軒丸瓦5点，軒平瓦1点の他，塙仏の小破片が1点出土した。また基壇土中から軒丸瓦1点が出土している。銅釘は17点あり，大部分は円頭の小型角釘であるが，1点だけ鍍金を施した環状の釘頭をもつものがある。長さ2.5～5.5 cm。土師器には皿の破片が数点ある。型的にみてもいずれも10世紀後半のものである。漆膜片は須弥壇上中央から背後にかけて多量に出土した。いずれも脱活乾漆像と思われる断片であり，そのうちには麻布，抹香漆，下地漆，黒漆，金箔の層が確認される。また像の大きさ，尊名等は細かい断片に分れているので確定しがたいが，等身大以上の大きさで菩薩像の可能性があると*。

和同開珎銀錢は須弥壇背後の斜面上で検出した。直径2.31 cm，重量5.75 gある。基壇土中から出土した軒瓦は単弁八弁の蓮華文軒丸瓦で，7世紀後半に位置付けられる。

まとめ 今回の調査は狭い範囲のものではあったが，坂田寺に関するいくつかの重要な知見を得ることができた。伽藍中枢の建物と考えられるS B 150の造営は，須弥壇の築成に直接伴う鎮壇具に含まれる28点の銅銭のうち大半が神功開寶であることから天平神護元年（765）を遡りえず，またこれより新しい銭貨がないことから，次の隆平永寶の初鑄年（延暦15年・796）を下らない

と思われる。

須弥壇の格狭間の花頭曲線による浮彫りの意匠は、古くは法隆寺玉虫厨子の宮殿部基壇の格狭間にみられるものの、正倉院蔵の箱物や厨子、几台類などの床脚（台脚）の削形や、法隆寺に伝わる奈良時代の作とされる仏像の台座の格狭間にも頻繁に用いられていることから、奈良時代後半期には比較的通有のものであったと思われる。SB 150 は基壇面直上に焼土層が堆積しており、焼失したものと判断される。焼失の年代は焼土に含まれていた土師器の年代観により、10世紀後半と考えられる。従って、SB 150 は8世紀後半に建立され、10世紀後半に至る2世紀のあいだ営まれていたことになる。

さて、SB 150 は坂田寺伽藍のどの建物に比定できるのであろうか。身舎中央に須弥壇が設けられていることから金堂あるいは講堂のいずれかと考えられよう。西面しているSB 150 の建物背後には東西30～40mの平坦地があり、そこに伽藍建物を想定することは可能である。一方、西方には東西100m以上の範囲にわたり、SB 150 の建物中軸線の方位の振れとほぼ同方向の水田地割が現存している。とすればSB 150 が金堂である可能性が強いが、今回の調査の限りにおいては、SB 150 の平面規模を桁行9間に想定することも可能であり、また基壇面が土間床である点からも、金堂と断定するには不確定な要素が残る。

坂田寺については、当調査部により過去2回にわたる発掘調査が行われている。いずれも今回の調査地から北西40～80mにあり、かつて石田茂作氏が門址ではないかと推定した地点（『飛鳥時代寺院址の研究』昭和11年）を中心に寺域確認のために行ったものである。前2回の調査で約1000㎡を発掘し、井戸、石組溝、柱列、石垣、池など7世紀から11世紀以降に至る多様な遺構を確認した。これらの遺構の性格については必ずしも明らかにされていないが、想定されていたような門跡は存在せず、方2.5mの大型井戸が示すように厨的性格がうかがえる。SB 150 が西面していることと、周辺の地形、現存の水田地割等から、伽藍は西方を正面としていたと考えられる。そうであれば、SB 150 が金堂あるいは講堂に比定されることから、第2次調査区の位置には回廊の存在が想定される。8世紀の造成になる東西方向の石垣 SX 120（位置図参照）は

南が約 2.5 m 高い壇を形成する。壇上は若干削平されていると思われるものの、SB 150 の基壇上面との高低差は 2 m 余りにすぎず、SX 120 とその南の壇状部が回廊にかかわるものである可能性がある。SB 150 の建物中軸線から石垣 SX 120 までの距離はほぼ 27.0 m (90 尺) であり、また更に北に検出されている東西方向の掘立柱列 SA 060 との距離は約 54.0 m (180 尺) あり、SX 120 は SA 060 と SB 150 の中軸線との丁度中間に位置することになる。また石垣 SX 120 にとりつく斜道 SX 122 の位置は SB 150 の南北方向の中軸線（棟通り）から、やはりほぼ 27.0 m (90 尺) に設けられており、これらの諸施設が一定の規格性をもって配置されていたものと考えられる。今回検出した SB 150 は前述したように 8 世紀後半に造営されたものであり、伽藍中心建物の一つと考えられる。これにより、坂田寺伽藍配置の解明に重要な糸口がつかめたことになる。しかし、文献や出土瓦類からうかがえる 7 世紀前半の寺創建時の建物は SB 150 付近には確認できなかった。

今回の調査で須弥壇鎮壇具を検出したことは重要な成果の一つに挙げられる。奈良時代の鎮壇具には従来、興福寺中金堂、元興寺塔、法華寺金堂、東大寺大仏殿などの例が知られる。しかしそれらはいずれも埋納状態が正確に確認されたものではなく、今回の検出例は発掘調査によるものとしては唯一の事例であり、それだけに今後の鎮壇具研究に貴重な資料となろう。なお、今回検出した鎮壇具に関する詳細な検討は、伽藍配置やその変遷の考察と共に刊行を予定している報告書に委ねたい。

※ 奈良国立博物館 仏教美術資料研究センター 仏教美術研究室長
田中義恭氏の鑑定による。